

# 適性検査Ⅱ

## 注意

- 1 問題は全部で2ページあります。
- 2 検査時間は45分で、終わりは午前11時30分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

次の資料を読んで、あとの問いに答えなさい。

資料A

日本には、能や歌舞伎、落語に茶道、そして柔道、剣道、大相撲などいくつもの伝統文化がある。

これらの伝統文化は、どんなに外国から新しい価値観や新しい文化が入ってこようと、微動だにしないで独自のスタイルを守っている。

住居も服装も食生活もこれだけ欧米化しているのに、そのブレない強さはどこからくるのだろうか。

これは完全に『型』のおかげだ。  
僕は中高大と学生時代にずっと剣道をやってきたのだが、はっきり言ってこれほど不思議な競技もないだろう。

特に中学や高校のレベルでは、筋力や体力では絶対に負けないはずなのに、簡単に高段者のおじいちゃんに負けてしまうのだ。下手をすると、はじき飛ばされてしまうこともあるから恐ろしい。

どうしてこんなことが起こるのかと言えば、もう剣道ならではの『型』のせいだと言いがたい。

武道といわれるものはほとんどそうだが、一度『型』を身につけた者は、圧倒的な強さを誇るのである。

そして、まだ『型』を身につけていない若造がどれだけ力任せに挑みかかっても、ほんのちよつと身体を動かすだけでポイントをズラすことができる。そして、たやすく勝利を収めることができるのだ。

その意味では、僕は学生時代に『型』の恐ろしさをイヤというほど味わった。だから、大人になってからも『型』の重要性を意識することができたのかもしれない。

ただ、なにも『型』を実感するのに剣道や柔道をやる必要は無い。もっと日常的な場面で、われわれはたくさん『型』を実感しているのである。

たとえば、和室で目上の人と向かい合うときには、誰だって正座をするだろう。

そうすると、背筋が勝手にスツと伸びて、それだけでも礼儀正しい凛とした気分になれるはずだ。

そして、相手から「足を崩していいよ」と言われて足を崩すと、気持ちまでもほぐれ、心からリラックスすることができる。

これなどはわかりやすい『型』の一例だ。

また、毛筆で手紙を書くとき、なんとなく改まった気分になるし、下駄で歩くときどこか豪快な気分になる。新幹線から富士山が見えると思わず息を飲んでしまうし、満開の桜を見るとそれだけで幸せな気分になる。

このあたりは、もう日本人のDNAと言っているだろう。

普段は欧米化した生活を送っているわれわれも、『型』に身を委ねると気持ちに微妙な変化が起きるのだから不思議なものだ。われわれの『型』とは、なにも能や歌舞伎のような伝統芸能の中にだけ息づいているのではない。

日常のあらゆる場面に『型』は潜み、われわれの心を動かしているのだ。

そういう『型』を持っていることを、もっと誇りに思うべきだろう。

(三田紀房「個性を捨てろ！型にはまれ！」による)

※DNA：地球上のほぼすべての生物がもつ遺伝情報を伝える物質。

## 資料B

武道や芸道では、まず癖を直すことがもとめられる。型による訓練は、個々人のもつ癖を矯正する働きをもっている。個々人が生活の中で身につけてしまった楽な自然の動きを、より高次の合理性をもった非自然的な動きへとつくり替えるのが、型の働きである。さまざまな癖は型の存在を通じていったん否定される。

武道・芸道の世界に比べて、スポーツの世界は、型の概念が比較的薄いこともあり、癖が生き残る余地が比較的存在する。むしろスポーツにおいても指導者によっては特定の型にはめこむ者もいる。その場合は癖は否定されるべきものとなる。また癖の中にも、プレーのパフォーマンスにとって致命的な欠陥となるものと、それほど障害にならないものがある。一流選手のプレーを見ると、独自のスタイルをもっていると感じさせられることが多い。「自分のスタイルをもっている」と感じさせるプレーヤーの場合、癖がうまく活かされて技に替えられていると見受けられることが多い。

たとえば、イチローの振り子打法といわれる、右足を大きく振りながらタイミングをとり、からだの軸を移動させて打つ打法は、従来の打撃理論からは矯正されるべき悪癖と見なされるものであり、実際、矯正を命じられたこともあった。この打撃の癖は、小学校時代にパワーがなかったイチローがバッティングセンターでボールをできるだけ強く遠くに飛ばすために編み出し身につけた技法である。結果がともなわなければ、これはただの悪癖と見なされるほかはなかったが、イチローの場合は結果を示すことによって、その癖が技であることを周囲に納得させたのである。

他人から見れば癖と見られるものも、システム全体の中で結果を出すように訓練され技法化されている場合は、他人には真似のしにくい独自の技となる。こうした技が、独自のスタイルをつくりあげるのである。

(斎藤孝「身体感覚を取り戻す」による)

## 問題1

資料Aと資料Bで、それぞれの筆者は、どのようなことを主張していますか。「型」という言葉を入れて、それぞれ百字以内で書きなさい。なお、や。や。「も一字として数えなさい。答えは一マス目から書きなさい。

## 問題2

あなたは、今、大人になった時の自分の将来像を、どのように思いえがいていますか。その将来像に近づくために、どのような「型」を大切にしていきたいと考えますか。また、どのような「独自のスタイルをつくりあげ」たいと考えますか。資料Aと資料Bをふまえ、小学校生活での経験や身近な人の例などを挙げながら、四百字程度で書きなさい。なお、必要に応じて段落分けを行い、や。や。「も一字として数えなさい。



古紙配合率70%再生紙を使用